疾患別
全国実力医師シリーズ

心臓病

最新治療&予防

全国名医118人

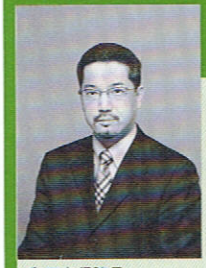
医療評価ガイド取材班

疾患別に実力医師を選び抜く!

この1冊で気になる症状・検査・標準治療・治療トピックがわかる

角川SSコミュニケーションズ

みやぎ北部循環器科


和田有行院長

和田 有行 院長

宮城県大崎市古川字本鹿島145
TEL：0229-21-8655
最寄りの駅／JR古川駅、車10分。東北自動車道古川IC、車3分

Staff
目黒泰一郎特別顧問・秋山英之医長・上村 直医員・横田俊生医員・斎藤澄子看護部長

外来診療日
月・水・金曜（9:00～11:30、15:00～16:30）
火・木・土曜（9:00～11:30）
日曜・祝日：休診（救急患者などは受付）

Profile
わだ・ゆうこう。1966年福島県生まれ。秋田大学医学部卒。仙台社会保険病院循環器科、仙台厚生病院心臓センター、古川市立病院循環器科を経て、2005年みやぎ北部循環器科を設立。現在、日本心血管カテーテル治療学会の評議員、指導医であり、仙台厚生病院心臓センター客員部長を兼任。

実績・成績
2007年1～12月で、PCI805例、CAG1573例、冠動脈CT検査493例、急性心筋梗塞59例、ペースメーカー埋め込み術50例。
2008年までの累計PCI件数5497件、累積CAG件数16491件、PCI成功率98.4%。

治療

24時間の救急体制と高い専門性で、地域医療のモデルケースに

和田院長は、2005年、みやぎ北部循環器科を設立。地域で盤石の救急医療体制を整え、患者一人ひとりに最良の医療を提供することを信条としている。東北随一の心臓センターを持つ仙台厚生病院との連携により、24時間救急即応体制で診療に当たっている。また、慢性期の外来診療については、地域のかかりつけ医の逆紹介を行うなどの診診連携、病診連携を推進している。

同院は、2年前、冠動脈CT検査に64列のマルチスライスCTを導入した。これはガントリーが1回転する0.4秒の間に0.5㎜の高精細断層画像を最大64枚撮影することができ、10秒間で心臓全体の画像の取得が可能である。スピーディ、かつ患者の身体的・精神的負担も少なく冠動脈狭窄の診断ができることがメリットだという。動脈乖離、動脈瘤、ASO（閉塞性動脈硬化症）等の診断・治療にも威力を発揮している。

冠動脈造影検査・冠動脈CT検査については、患者の症例に応じていずれが適切であるかを判断することができる。最初から冠動脈造影検査が好ましい症例については無駄な検査を行わず、患者の負担を軽減することを心がけている。なお、冠動脈造影検査自体の安全性は施設によって異なるため、検査を受ける場合には慎重を期すべきではないか、と提言している。

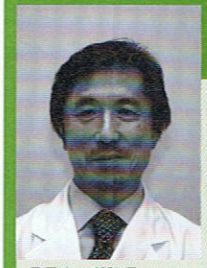
同院は、仙台厚生病院グループの方針として、心臓カテーテル手術においてはベアメタルステントを基本としている。再狭窄が起こりにくいことを理由に、近年事例が増えているDES（薬物溶出性ステント）に対しては、まだ長期的な安全性が確立されていないことや、抗血小板薬の長期投薬が与える患者への負担を考慮し、導入には慎重な姿勢をとっている。

東北という地域的な特色として高齢者が多く、都市部に比べてPCI治療を受ける患者の平均年齢が高い傾向にある。そのため、患者には動脈硬化の進行なども見られ、ハイリスクな治療が求められるケースが少なくないと同院長は強調する。そのようなときにも、恩師でもある目黒泰一郎医師（現仙台厚生病院理事長）の教えを精神的な支柱として、医療に従事しているという。

現在、地方自治体の財政は悪化し、人材確保の問題はさらに深刻化しており、地域医療は危機的状況におかれているといえる。そんな中、ローコストかつコンパクトで無駄のない医療システム構築と人員配置の必要性を訴え、スピーディな検査・治療を行っている同院長。地域医療のモデルケースとなる道を模索しているところだ。

仙台厚生病院　心臓血管センター循環器内科

目黒 泰一郎　院長


目黒泰一郎院長

宮城県仙台市青葉区広瀬町4-15
TEL：022-222-6181
最寄りの駅／地下鉄北四番丁駅、徒歩15分
バス厚生病院前下車

Staff
井上直人主任部長・伊藤祐子部長・密岡幹夫部長・大友達志部長・滝澤 要医長・本多 卓・鈴木健之・森 俊平・青野 豪　ほか８人

外来診療日
水曜（午後・再診）
紹介状要。予約制

Profile
めぐろ・たいいちろう。1947年宮城県生まれ。東北大学医学部卒。東北厚生年金病院循環器科医長、仙台社会保険病院循環器科部長などを経て、2001年から現職。日本心血管カテーテル治療学会指導医、東北大学非常勤講師、日本循環器学会認定循環器専門医、日本内科学会認定内科医。

実績・成績
PCI1448件（うち急性心筋梗塞273件）。CAG5274件、心エコー11693件、頸動脈エコー2008件、ペースメーカー植込術179件、カテーテルアブレーション25件、循環器救急車受け入れ1660件、モービルCCU出動178件（科全体・2008年）。

治療

低侵襲な心カテーテル治療のスペシャリスト

目黒院長をリーダーとする心臓血管センターは日本でもトップクラスの治療実績を上げている。特に虚血性心疾患に定評があり、冠動脈カテーテル手術（PCI）の数は群を抜く。治療は同院長によって、あるいは院長の監督下で行われるが、その95%が手首の動脈（橈骨動脈）からカテーテルを入れる方法だ。

脚の付け根の動脈からカテーテルを入れる方法は、ベッド上での安静が必要となる。「身動きができず、拷問のようだ」という患者の言葉を重くみた同院長は、オランダの論文に着目し、手首の動脈からカテーテルを挿入する方法が可能であることを確信した。早速、この方法を取り入れ、実績を積み重ねてきた。手首経由の場合、患者は歩いてカテーテル室に行き、車いすで病室に戻り、ほどなく歩くことができるので、苦痛が大幅に軽減される。同院長が心カテーテル治療のパイオニアとして知られる所以だ。

もともとカテーテル装置は、医師が右利きであることを前提に設計されており、オランダ方式も右手首からの挿入法だった。しかし日本人の多くは右利きなので、左手首から入れれば右手を使うことができ、患者の負担が少なくて済む。そのため同院長は左手首から挿入する技術を考案し、左アプローチ用の機器を開発した。また、手首の動脈は細く、サイズの大きなカテーテルでは損傷の危険があるが、それを回避するために細くて低侵襲なシースレスカテーテルを開発し、実用化している。さらに、ロータブレーターやエキシマレーザーなどの最新治療機器も導入している。

ステントについては、同院長は自身を“適切使用派”と言う。薬剤溶出ステント（DES）は長期成績が出ていないこともあり、現状では50%以下の使用となっている。通常のステント、DESそれぞれに一長一短があるため、個々人のケースに合わせて使用している。

手術時間は30分以内を基本とする。長くカテーテルを入れておくと危険度が上がるため、術前の計画をしっかりと立て、安全第一に、短時間で行う。また、手術の実況を患者の家族にわかりやすい形で見せ、説明することも特色のひとつ。万が一手違いやミスがあり、実害が生じなかった場合でも情報を開示するのが同院長の方針だ。

同院は地域医療支援病院に指定されており、高度先進医療、救急医療を提供するべく、モービルCCUを２台配備している。さらに、心臓血管センター３人を含む計６人の当直医を置いて、365日24時間体制で治療にあたっている。